

## 終助詞と認知様相 Japanese Sentence Final Particles and Epistemic Modality

川森雅仁 (NTT 基礎研究所)  
Masahito Kawamori (NTT Basic Research Labs)

**概要** 終助詞を用いた文が単に命題を表す以上のことをしていることは、日本語に特徴的である。「よ」「ね」「よね」等の終助詞は話者と聴者との間のやりとりで大きな働きをしている。それゆえ、実際の談話における発話の意味を扱おうという時に、終助詞に関する理論は不可欠である。にもかかわらず、従来の理論言語学においてこのような現象はさして大きな注目を与えられてこなかった。終助詞のうち「よ」「ね」「よね」の三つを、それぞれ比較することにより、これらの持つ、知識との関わり、指標的性格などの意味的特性を明らかにする。

**Abstract** The Japanese sentence final particles, *yo*, *ne*, *yone* play an important role in the interaction between the speaker and the hearer engaged in a natural dialogue, in that they show inherently indexical characters, just as such words as *I* and *here* do. In this paper, the close relationship of these particles with the speaker/listener's epistemic state is described and clarified, and a theory is presented that is intended to characterize their behavior in terms of the speaker's contextual knowledge about the state of knowledge of his own and his interlocutor.

### 1 はじめに

会話に多用される「よ」「ね」「よね」などの、終助詞は、従来の国語学では、その重要さが看過されることが多かった [6]。また、日本語の記述的研究においても、英語の付加疑問等と同列に、おかれて、主に文体論的な観点からの記述がほとんどであった [4]。いずれにせよ、これらの終助詞の、談話における働きに注目し、意味論を与えようという試みは、ほとんどなかったといえる<sup>1</sup>。ここでは、終助詞のうち「よ」「ね」「よね」の三つをとりあげ<sup>2</sup>、それを比較することにより、それぞれの持つ意味的特性を明らかにしたい。まず、これらの終助詞が、談話において大きな働きをし、特にその指標的機能から、発話者と聴者との認知的様相と深い関わりを持っている事を示し、さらに、その、発現の条件を非形式的に、記述する。

### 2 談話と終助詞

#### (1) クツの紐がほだけている

という文と

#### (2) クツの紐がほだけているよ

という文の間には大きな隔たりがあるように思える。前者は、単に事実を客観的に記述している命題に近い意味を持つ文であると考えられる。それに対して、後者は明らかに誰かに話しかけている文であると思われる。

普通の談話や会話で (1) の文を用いた場合、非常に紋切り型な印象を与えることは確かで、不可能であるとは言わないまでも、かなり不自然な文とみえる。一方、後者の (2) の文の方は、ごく普通に使うことのできる自然な文で

<sup>1</sup>この点で、例外的なのは [5] である。そこでは、終助詞「か」について談話的認知的立場からの考察が加えられている。

<sup>2</sup>ここでは、「よね」は「よ」+「ね」とは別のものとして扱う。

あるだけでなく、会話的な文に特徴的な形であるときえ言える。

また、さらに、(1) の文が文体的に談話に普通に現れただけでなく、意味的にも (1) と (2) の文は、異なっているようである。(2) において、「クツの紐」は、まず第一に聴者の靴の紐であると考えるのが自然であると思われるが、(1) においては、「クツの紐」が誰のものであるかは、問題になっていないかのようである。

(1) と (2) との間だけに、このような差違が、存在するわけではないことは明らかである。つまり単純な断定文に、「よ」を付加することによって、その文は会話の中に普通に用いることができ、さらに、ものと断定文との間には、上であげたような、様々な差異が、見い出されるということは、予想される。

換言すれば、そのままでは、普通に談話に用いることのないような、客観的命題を表すような文も、「よ」をつけることによって、普通に会話的な表現として使えるということである。

逆に、談話や会話以外の場面で「よ」を付加した文を用いることは不自然なことである。例えば、新聞のコラムや記事に

#### (3) ブッシュ米大統領は本日、湾岸地域からの米軍撤退を命令した

と書かれることは、ごく普通であると思われる。この文は客観的に、起きた出来事を記述していると言える。しかしこの文に「よ」を付与した

#### (4) ブッシュ米大統領は本日、湾岸地域からの米軍撤退を命令したよ

という文が、新聞の記事として書かれることは、ほとんど絶対とっていいほどないと思われる。このように、「よ」を付与した文は、典型的に談話に現れるだけでなく、談話以外には典型的に現れないといえる。つまり、「よ」は談話に現れる文に特徴的であると言えよう。

終助詞を付与した文と、そうでない元の文との談話における働き（すなわち、単に命題を現すような文は、しばしば談話において不適切である時にも、「よ」を用いることにより適切な文になるということ）が、日本語の特徴の一つであることは、英語と比較してみた時に明らかになる。英語において (1) に対応すると考えられる<sup>3</sup>

(5) Your shoe-string is untied

という文は、ただ単に命題を客観的な事実として表しているのみならず、実際の会話や談話においても、使用することが自然な、極めて普通の文であると思われる。

(5) の文の代わりに、付加疑問の

(6) Your shoe-string is untied, isn't it?

や、あるいは (2) を翻訳するとされる

(7) I tell you that your shoe-string is untied

という文を発話しなくても、(5) は、十分、普通の発話をなすだけでなく、後の二つの文はそれほど普通に用いられる文とは思えない。

このように、終助詞を用いた文が単に命題を表す以上のことをしているであろうことは、日本語に特徴的である。さらに最初の例からもわかるように「よ」は話者と聴者との間のやりとりで大きな働きをしていると思われる。

つまり、「よ」は話者と聴者のやりとりに関与するだけでなく、話者と聴者の関与が問題にならないような場面では現れない語であるといえる。このことは実際の談話における発話の意味を扱おうという時に、終助詞に関する理論が不可欠であることを十分に示唆するものであると思われる。但し、この二つの文が単に文体の違いであるとする意見は力を持たない。なぜなら、そのような理論はこの二つの文がなぜ異なった文体に属するかをまず説明しなければならないからである。

### 3 指標性

話者あるいは聴者の存在を考慮に入れて意味論を考える時、単なる命題の視点から意味を研究する時とは全く違った興味深い事実が浮かび上がってくる。話者を表現する「私」という言葉をふくむ文はこの点で特に大切なものである。Kaplan [2] は、その直示表現に関する考察の中で、「私」に関する重要な文を紹介している。それは

(8) I am here (now)

という文である。ここで「I」はもちろん、『話者』を指し、「here」は話者のいる地点を指している。この普通の解釈の元で、(8) は、誰がどこで発話しても必ず真になるという性質を持っていると Kaplan は指摘した。つまり Lincoln が 1854 年に Oklahoma で (8) を発話したとしても、あるいは Armstrong が 1967 年に月面で (8) を発話したとしても、どちらの場合も、「話者が自分がまさにいるそ

<sup>3</sup>英語では誰の靴の紐かを明らかにしなければ行けないので、便宜上一番普通だと思われる解釈をもとに翻訳した場合を考える。

の場所にいる」ということを主張しているに過ぎないという点で真であるといえる。

同様に、日本語においても

(9) 私は (今) ここにいる

という文は同じ性質を持っているはずである。実際、そのように考えるのは正しいだろう。確かに福沢諭吉が間臨丸でアメリカのサンフランシスコについてその時に (9) を発話したとしても、植村直巳がマッキンゼー山で (9) を発話したとしても、その真理には間違いはない。福沢諭吉は、アメリカで (9) を発話したとしたら、確かにその発話した場所に存在していたはずだろうし、植村もまたそうである。

(8) あるいは (9) の文が興味深いのは、福沢諭吉が間臨丸でアメリカに行ったことや、Armstrong が月面に到着したことは、実は歴史上の蓋然な事実であり、必然的事実ではないということである。(間臨丸が途中で遭難して、実は、例えばハワイにいたということもあり得ただろうし、アポロ計画は失敗していたかもしれない。) それゆえ、福沢諭吉が間臨丸でアメリカのサンフランシスコについてその時に、

(10) 福沢諭吉は (今) サンフランシスコにいる

と福沢諭吉が (9) のかわりに、発話したとしても、これは必然的な命題を現してはいない。しかし、福沢諭吉が (9) を発話した場合、「私」が指しているのは (10) において、「福沢諭吉」によって指されているのと同じ、福沢諭吉自身であり、また「ここ」が指している場所も「サンフランシスコ」を指しているのと同様に、あの金門橋で有名な都市であるはずである。このように、指示物を考えた時、(9) の現している内容 (真理条件) と (10) のそれとは同じはずである。それゆえ、(9) の表している事実はある面で (10) の表しているのと同様であり、それゆえ非必然的、蓋然な事実である。このことは、福沢諭吉以外のどの話者が (9) を発話した時にも同様で、やはりその表す事実は非必然的な真理条件をもっている。にもかかわらず、この節の始めて述べたとおり、(9) は「話者が自分がまさにいるその場所にいる」ということを主張しているに過ぎないという点で、誰がどこで発話しても必ず真になる文なのである。つまり、(8) あるいは (9) の文は、蓋然な事実を表しているながらも、誰がいつどこで発話しても必ず真であるという性質を持っているのである。

Kaplan によれば、我々は (8) (あるいは (9)) の、このような性質を「I」(あるいは「私」) および「here」(あるいは「ここ」) という語の持っている指標性という性質に帰着させることができる。ここでの、指標性とは「発話のコンテキストに依存して指示物が決定される」という程の意味である。つまり「私」「ここ」「今」などの語はある発話のコンテキストにおける『発話者』『発話の地点』『発話の時点』などをそれぞれ表しており、発話のコンテキストが決定されて始めて命題の内容が決定できるのである。それゆえ全ての発話のコンテキストで (9) は『発話者』が『発話の地点』にいるということは常に真であるといえる。しかし、一方、各々の発話者 (例え

ば福沢諭吉)が実際にその場所(例えばサンフランシスコ)にいるという事態を表すのは蓋然的命題である。

「私」「ここ」などの指標表現が興味深い所は、発話のコンテキストが決まれば必ずこれらの指標表現の指示物が決定できるという点である。それに対して指標表現と共に deictic と呼ばれて、一つの範疇をなすと言語学では教えられている。「この」「それ」「あそこ」などの表現は、この点が異なっている。これらの表現の指示物を知るには、発話のコンテキストだけでは不十分で、それに加えて、指で指し示すなどの直示行為を伴わなければならないことである。たとえば、本屋で

(11) この本をください

と発話したとして、直示行為が何らかの形で伴っていなかった場合、どの本が「この本」によって指示されているのか理解されるのは困難であろう。この直示行為の有無が指標表現とそれ以外の「これ」「その」「あそこ」などの表現の大きな違いである。それゆえこれらの表現は直示表現と呼ばれる。換言すれば、指標表現は、直示行為を伴わずに、発話のコンテキストによってのみ、指示が決定できるような表現であり、それに対して、直示表現は発話のコンテキストに依存して、直示行為を伴って始めて指示が決定できるような表現である。

指標表現が同時に直示表現のように働くことも考えられないことではない。例えば、「ここ」という表現は直示を伴わなければ、発話の地点を指すが、直示を伴って、例えば、地図の上の一点を直接指しながら発話したりした場合、直示表現と同様の働きをする。このような場合、「ここ」は「この場所」と同じような意味を持っていると言え、発話のコンテキストだけでは指示物は決定できない。

#### 4 指標性と終助詞

前節で見て判るように、発話のコンテキストと、そこに含まれる発話者、発話の地点などを考慮に入れて、意味を考えることは、言葉や文の「意味」とは何かを単なる命題的内容だけで「意味」を考える以上に興味深い事実を示してくれる。実はこのような意味で捉えられた「意味」という概念の方が我々が日常的に考える「言葉の意味」という概念に近いように思われる。すなわち、我々が普通に「言葉の意味」と言う時、我々は、発話のコンテキストに特定の命題ではなく、コンテキストに共通した、コミュニケーションの道具としての「意味」を考えているのであろう。それゆえ『「私」という言葉の意味は何ですか』というような質問が可能なのであろう。

第1節で示したように、「よ」等の終助詞は対話に特徴的である。対話における意味を考慮する場合、発話のコンテキスト、特に話者や聴者などは不可欠であるから、前節で紹介された知見は「よ」等の終助詞の働きを明らかにする上で、大きなヒントを与えてくれるはずである。実際、(9)はその特別な性質から、他の表現に対する一種の「意味論的原点」であると言っても過言ではないだろう。この文が他の表現と同じ環境に現れた時の意味の変化や予想される発話のコンテキスト上の制約などを観察すると

とにより、表現の意味がどのような特徴を持っているかを調べることができるかも知れない。

さて、(9)の文に「よ」を付加した文を考えてみよう。

(12) [私はここにいる]よ

この(12)の文について、気づくことがいくつかある。まず第一に、この文が、「ここに」という語も「いる」という語も(9)におけるのと同じ意味を保持したままで、会話で用いたとしても、不自然ではないということである。

第二に気づく点は、会話で用いるのは不自然ではないにしてもこの文を発話して自然であるような状況は、ある程度制限されているということである。例えば、「かくれんぼ」の時に、隠れている人が「鬼」になった人間に(12)を発話することは自然に思える。つまり、(12)を用いて不自然にならない発話のコンテキストにおいては、話者は自分の位置を知らない誰かに、その場所を伝えたいというようなことが成り立っている時等であると考えられる。逆に、聴者が目前にいるような時には(12)は普通は使われないと思われる。最後に、聴者は(12)の発話から、話者がどこかにいるという情報以上にはさほど得ることがないということである。

第一の事実は(12)を、他の終助詞を(9)につけたときと大きな対比を見せる。そこで、(12)の「よ」の代わりに「ね」をつけた場合の<sup>4</sup>、

(13) 私はここにいるね

を考えてみよう。この文を会話で用いる事はそれほど不自然ではないし、「ここ」という言葉も(9)における時と同様指標的な意味を持てる。しかし、「いる」の意味は、(9)や(12)における時とは違った意味合いを持つのが普通であろう。つまり(9)や(12)では、「いる」は「在する」という意味であったが、(13)では、「留まる」に近い意味で、英語に訳せば「I will stay here」に対応する表現であるように思える。もし、(13)の「ここ」も「いる」もが、(9)や(12)におけるのと同じ意味であると解釈するとすれば、この文は非常に不自然になり、おそらく、精神的問題等によって、自己という概念が欠落している人間等以外によっては発話される事はないのではないかと思われる<sup>5</sup>

また一方、(12)の「よ」の代わりに、「よね」という終助詞をつけた場合<sup>6</sup>を考えてみよう。

(14) 私はここにいるよね

<sup>4</sup>単に調子を整えるためだけに、各文節の切れ目におくことが可能な「ね」と区別すること。両者は無関係では無いであろうが、ここでは意味的に別のものと考える。

<sup>5</sup>もう一つの例外的場合は、手品等で話者が、自分が確かにそこに存在している事を、聴衆等に確認している場合であろう。このような場合の(13)の発話は、ちょうど、答を知っている教師が生徒に質問するときのように、ごく普通のコミュニケーションを目的としていないようにも考えられる。

<sup>6</sup>(12)の「よ」に調子を整えるための「ね」がついたものと、区別しておく。「最近麻雀ばかりしてるんだよね」は実質的には「最近麻雀ばかりしてるんだよ」と大差ないようにみえる。音調も若干違うように感じる。

この文を聞いたり発話したりすることは非常に希であるとは思えるが、発話可能な場合を想定する事はできる。例えば、地図で一点を指し示して自分がいる場所を確認しようとしている時に(14)を発話するのはより自然であるといえる。しかし、そのような状況を想定した場合、この文の「ここ」という語が、(9)や(12)の「ここ」とは違って、純粋な指標表現としては用いられていないという事が分かる。(14)においては「ここ」という語は、直示表現としてしか、使われなれないといえる。なぜなら、もし「ここ」が直示行為を伴わないと(14)は意味的におかしな文になってしまうからである。この場合も、(13)の時と同様、精神障害の場合のように、何らかの理由で自己の存在が話者にとって信じられない時以外には、ありえない意味のように見える。このように、(12)だけが、上で考慮した三つの文のうち(9)の意味を保持したままで、曲がりなりに自然な発話をなす事ができる事は興味深い。

(12)の意味の持っている第3番目の特徴は(9)の三つの特徴、即ち:(a) 発話が発話者によってなされているという事実とほとんど同程度の情報しかもっていないこと(「あっ!」と叫んでも「私」というだけでも、伝わる情報はそれほど変わらない)、(b) 誰が発話しても発話が行われたとたんに真である事が分かる事、そして(c) 誰でもがこの事実を(内的にであれ)認識している事、この三つを考えあわせると、納得がいくものである。

この(9)の持っている三つの特徴と「よ」だけが(9)の意味を保持したままで、曲がりなりに自然な発話をなすことができることは、(12)の上の第二の性質(つまり、「かくれんぼ」のような、状況で発話可能であること)と相まって、「よ」の用法について重要な事を示唆する。すなわち、「よ」は話者が確実に信じえる『意味』を持つ文に付与されるが、その時、「かくれんぼ」のように、聴者はその文のあらゆる情報を持っていない。つまり「よ」がついた文は、話者が確実に信じているが、聴者は知らない(であろうと予測できる)命題を表す文に付与されるといえる。一方、逆に「ね」「よね」は話者にとって確実な事を表す文には付与されないという事が分かる。

## 5 知識と終助詞

(9)は誰が発話しても真である(と誰もが知っている)という特殊な文であった。しかし、より主語に意味的に依存した文を考えることにより、上の最初の「仮説」を確認することができる。

「おなかがすいた」というような、感覚をあらゆる述語を含む文が、主語の意味に依存して、その容認性を変えることはよく知られている。その理由として、「他人の感覚は、経験主体以外には知覚され得ない」という、一般化を仮定してみよう。

そこで、このような述語の主語が発話者をさしている、次の文を考えてみよう。

(15) 私はおなかがすいています

発話者の空腹感は、上の一般的仮定から、発話者以外には知覚され得ないのであるから、特に聴者は発話者の感覚を

知る事が出来ない。さらに、発話者が唯一の感覚主体であるから、自分の感覚を確かに知る事ができる。

これは、まさしく、前節の『「よ」がついた文は、話者が確実に信じているが、聴者は知らない命題を表す文に付与される』という仮説の条件にあてはまっている。もし、この仮説が正しいなら、

(16) [私はおなかがすいています]よ

という文は、「よ」が付いた文の典型的なもの例であるといえるが、実際にそうであるようにみえる。

さらに、上の仮説によれば、(15)は逆に「よ」以外の「ね」「よね」には、付与できないことが予想される。なぜなら、発話者は自分の感覚に確信を抱かないということとは不可能であると、思われるからである<sup>7</sup>。実際に、(15)に「ね」を付与した

(17) ?[私はおなかがすいています]ね

という文も、「よね」を付与した

(18) ?[私はおなかがすいています]よね

という文も、どちらも意味的に普通ではなく、おかしく聞かせる。

(16)に対し、聴者が主語によって指示されている場合、ちょうど反対の理由から、おかしな文ができるはずである。実際、(19)はおかしな文である。

(19) ?[あなたはおなかがすいています]よ

聴者が知っているはずの聴者の感覚に関して、発話者が確信を持つ事は不可能であるし、また聴者が自分の感覚について確信を抱いていないという理由も普通は見いだせないであろうから、これは上の仮説と合致する。

しかし、

(20) ?あなたはおなかがすいています

という文自体がおかしいのだから、これは、「よ」の意味に依存する事なく変な文である、とする議論は、ここでは通用しない。なぜなら、もし、先の、感覚に関する一般化が正しいなら、「彼」の感覚も同様に発話者には知覚不能なはずである。しかしながら、

(21) [彼はおなかがすいています]よ

は、普通の文に見える。この場合、(21)と(19)の大きな違いは、(20)は聴者にとって不確実であることが普通ではない命題(聴者が自分の空腹を知覚できないとは考えづらい)を表す文に「よ」がついているのに対し、(21)はその可能性が大いにある(聴者は「彼」の空腹感を経験できるわけではない)ことである<sup>8</sup>。重要なことは、(19)に

<sup>7</sup>もちろん、病気等によって、自分の感覚がはっきりしない時を除く。

<sup>8</sup>3人称の感覚述語が純粋に感覚を意味するのではなく、感覚の結果として表れ得る行為の観察結果から間接的にその感覚を持っていると知り得る場合も「おなかがすいている」のような述語を使えるというのは、比較的分かりやすい事である。(21)と(19)では、それ故、「おなかがすいている」の意味が若干異なるという事になる。

おいては、前節であげた「よ」の仮説の条件を満たすような事が、普通ありえないということである。つまり、発話者は聴者の空腹感を知り得ないし、たとえ、外見から(21)のように、空腹らしいと判断できたとしても、聴者が自分の空腹を知覚できないと考える根拠は存在しないのである。

さらに、(19)に対し、「よ」「よね」を用いた場合、文のよさが逆転する。つまり、

(22) [あなたはおなかがすいています]ね

という文も

(23) [あなたはおなかがすいています]よね

という文もどちらも、日常的に聞くことができる文であるように見える。このことから分かることは、「ね」「よね」は、発話者にとって何らかの不確実性を持つ命題を表す文に付与されるということであろう。すなわち、人は普通、自分の知覚を疑うことはできないから「よ」以外の終助詞は話者を指示する名詞を主語にした文とは使えないが、一方、聴者の知覚は話者には不確実であるから、主語が聴者を指す文の場合は、「よ」以外の終助詞でなければならないということができる。

上の知覚的述語と話者/聴者および「よ」「ね」「よね」とのかかわり合いの仕方は、英語の認識様相を表す助動詞 must の使用の仕方と興味深い対応を示している。次の例で分かるように、

(24)

- a. I am hungry,
- b. \*You are hungry,
- c. \*I must be hungry,
- d. You must be hungry.

must という助動詞は、知覚を表す述語と一緒に現れた場合、主語が一人称であるか二人称であるかで、文の許容度が変わる。さらに、must の許容度の変化に関する説明も、上の感覚述語に関する一般の仮説に基づいて与える事ができる。この意味で、must の上の例における振る舞いは、その変化の仕方が、ちょうど、「よ」「ね」「よね」の許容度の変化と対応しているといえる。普通、must という語は「...に違いない」というように翻訳されるが、それとは独立に、「よ」等の終助詞も認知助動詞 must と似た振る舞いを見せるということである。このことから、「よ」「ね」「よね」の終助詞が認識様相と深い関係をもっていることが理解できる。

今までのところで明らかになった「よ」「ね」「よね」の性質は

文のあらゆる命題と、聴者の知識についての、話者の態度を示す

ということにまとめられる。さらにこのことには二つの事実が関与している、すなわち、「よ」「ね」「よね」は

- 指標的表現に近い働きを持ち、
- 知識様相と似た働きをする。

ということである<sup>9</sup>。

上の仮説が正しいならば、客観性を持って判断できる述語を持つ文の場合、主語が何であっても、「よ」「ね」「よね」のどの終助詞を付与しても、良い文となることが予想されるが、実際にそうである。

(25)

- a.[あなたは双子座です]よ
- b.[あなたは双子座です]ね
- c.[あなたは双子座です]よね

ここで、「双子座」という述語は「双子座生まれの人」と同一の意味であると考えられるが、自分が双子座の生まれであるかどうかは、誰でもが知っている事ではないし、また自分だけが知れる事であるわけでもない。

しかし客観性を持っている時は、いつも、これら三つの終助詞のどれもが全く同じように使えるというわけではもちろんない。例えば、客観的であつ誰でもが、知っているであろうと期待できるような事実については、これらの終助詞は、それぞれ意味的に整合的な発話を構成するために、異なった条件を要求する。例えば、次の文を考えてみよう。

(26) 今日は天気が良いですよ

この文は、通りで出会った人に対する発話としては不適切であろうが、しかし、例えば、部屋の中で寝ている人に対して、窓の外を見ている人が行なった発話としてなら適切であろう。上の仮説から考えると、道で出会った人は誰でも、天気がどうであるかという事は知り得ると期待できるからであろう。それに対して、部屋の中で寝ている人は、たぶん外の天気がどうであるかを知らないと予想できる。故に、後者の状況では(26)は、普通の発話であるが、前者の場合は普通ではないという事が、説明できる。

一方

(27) 今日は天気が良いですよね

という「よね」を用いた文は普通に人が面と向かって対話している時はまず聞くことのない表現であると、思われる。しかし、もし東京にいる人が大阪に電話をかけながら、大阪の、天気について話している場合には意味的に無理のない発話になると思われる。このような、状況では発話者が指している「天気」が、発話者の知り得るものではないからである。

また、一方

(28) 今日は天気が良いですね

という文は、道で出会った人に対しても、ごく普通に、使う事のできる発話であろう。しかし、発話者の指している「天気」は、まさに彼が知る事ができる天気のはずであるから、この場合、発話者は天気がどうであるか確信を持って知っているはずである。そうすると、前の仮説からいうと、この文は使えないはずである。その説明は、天気がど

<sup>9</sup>つまり、これらの終助詞は指標性を持った命題的態度 (propositional attitude) と似た機能を果たしていると言えないこともない。

うかは客観的な事実であっても、それに対する判断は、主観的なものであるという事実と、関係しているようである。つまり、天気はどうであるかを、発話者は知っているかつそれが発話者にとっては「良い」と呼べるものではあるが、それが、はたして、万人が認めるような判断であるかどうかは、「良い」という判断が主観的なものなので、分からない。そこで、聴者の判断をあおぐというようなことが、行われているようである。

このような説明が妥当なものであることは、ある種の尺度あるいは基準の存在を仮定する形容詞などを述語とする文も、同様に客観的な知識が可能ではあるが、同様の条件をその発話の背景に課することから推し量ることができる例えば、「背が高い」という述語は、ある（客観的であれ、主観的であれ）基準以上の身長を持っている対象に適用されるものであるが、終助詞をつけた発話を可能にする場面、あるいは状況がかなり異なったものになっている。例えば、「よ」を用いた

(29) [彼は背が高いです]よ

の場合は、聴者が「彼」の身長を知らないか、誤解している時に用いられるであろう。それに対し、「ね」を用いた

(30) [彼は背が高いです]ね

の方は、発話者も聴者も、「彼」の身長に、ついでに知識があり（例えば、目の前で「彼」を見ている。）発話者の主観的「高さ」の基準からは「彼」は背が高いが、それが本当に、客観的な尺度からそう言えるかどうかは、分からないというような場合に用いられるであろう。このように、どちらも可能な文ではあるが、その背景にある、話者と聴者の間の知識に関する条件が異なっている。さらに、「よね」を用いた

(31) [彼は背が高いです]よね

は、もし実際に会話に用いることがあるとしたら、話者が「彼」によって指されている人物をあまり良く知らない時に、用いられることが多いと思われる。これは、ある人をよく知っていれば、当然その人の身長に対しても発話者の主観的信念あるいは判断があるはずだ、という一般的仮定からくるものであろう。

上で見た、「ね」と「よね」との条件の差異に関する事実は、その意味の違いを反映している。つまり、「よね」が、不確実性が存在しえない命題を表す文とは一緒に出現し得ないのに対し、「ね」は主観的な判断あるいは信念を越えないような命題、換言すれば、「話者と聴者が共通に知っている客観的の真理という事はできない命題」を表す文に付与される。

の予測は次の例によって強められる。

次の「ね」を伴った文の表す命題は、話者の主観的意見に対する確認のように見える。

(32) [あなたは背が高いです]ね

一方、「よね」を使った次の文は普通の対話においては非常に不自然に聞こえる<sup>10</sup>。

(33) ?[あなたは背が高いです]よね

しかしながら、もし話者が電話で話している場面を想定すると可能になる。もし、聴者と面と向かって対話している時には聴者の身長に関して主観的な確信を得ざるを得ない。自分自信の基準自体で、そう確信するには充分である。尺度を持った形容詞の場合このように、聴者を目前にした時には「よね」を伴った文には現れ得ないようである。

さらに、「よね」のついた文の場合その表す命題は発話の時点で不確実なものであるが、「ね」がついた文の場合その直前までは少なくとも信じていなかったという含みがあるようだ<sup>11</sup>。例として、

(34) 僕の奥さんきれいですね

という文は普通はあまり発話しないと思われるが、例えば、お見合い結婚で自分の妻をまだ見た事の無い人が始めてみた妻になるべき人を見ながら発話している場合を、あるいは自分の妻が離れたところを他の女の人と歩いているところを見て発話した場合を想定すると可能になると思われる。

最後にまとめとして、今まで、述べてきたことを整理してみると、以下ようになるだろう。

φよ という文を発話した時

- (a) 話者はφの表す命題を確実に（信じると）信じている、
- (b) 話者は聴者がφを知らないであろうと予測できる<sup>12</sup>

φね という文を発話した時

- (a) φは客観的に真になりうる。

<sup>10</sup>つなぎの「よね」と区別すること。「あなたは背が高いですよね、（だから背の低い人の気持ちがわからないんですよ）」。『あなたは背が高い、だから背の低い人の気持ちがわからない』。

<sup>11</sup>このように、「ね」の意味表示には、起動相的な時間に対する言及が必要になるように見える。

<sup>12</sup>「クツの紐がほどけていますよ」の意味は「あなたのお金の紐がほどけていますよ」であるというのが普通であろうが、いつもそうというわけではない。例えば、召使に対して王様と言えば、たぶん「私のクツの紐がほどけていますよ」の意味になるであろう。あるいは、「お金が落ちていますよ」は、必ずしも「あなたのお金が落ちていますよ」という意味ではないし、また「ライオンが寝ていますよ」の意味は「あなたのライオンが寝ていますよ」ではない。

これらの事は、「よ」がつく文の表す命題内容（あるいは、それを知ること）が、聴者にとって何らかの重要性あるいは高い relevance を持つことが条件として加えられるべきだろう。例えば、一般には他人の靴の紐がほどけている事は、聴者には重要ではないが、王様の靴の紐をしぼる係りの召使にとっては、必ずしもそうではない。また、お金は誰にとっても、重要なものであるとすれば、お金が落ちていれば誰のものであっても、それは聴者には relevant であるといえる。また、ライオンは何処にでもいるわけではないので、寝ていればなおさら relevant といえよう。

- (b) 話者にとって  $\phi$  は不確実な可能性を持っている (つまり自明であったり、確信しているような命題ではない)。
- (c) 話者にとって  $\phi$  は、信念 (belief) ではあるが、それが真であるかどうか、すなわち知識 (knowledge) であるかどうか、しられていず、かつ聴者の知識によって  $\phi$  が真であるか否かの判断が可能である (という期待が話者にはある)

$\phi$  よね という文を発話した時

- (a) 話者は  $\phi$  を確実に信じることができない。
- (b)  $\phi$  は客観性がなくても、話者が信じうる (あるいは信じたい) 不確実性を表す。
- (c) 聴者も  $\phi$  を信じて (知っている) いると話者は期待している

## 6 形式化の試み

この節では、今まで直観的に見てきたことを、形式化する方法を考えて見たい。我々の考えている終助詞が指標性を持ち、かつ知識様相に関与するということからここでは、状況意味論 [1][2] を素朴な形で用いた、形式化をする場合について若干の考察を加えてみたい。「よ」「ね」「よね」全部を扱うのは、ここでは無理であるので、特に終助詞「よ」を取り上げ、その意味について考えて見ることにする。

まず、前節で抽出した「よ」の意味特性を次のように表してみる。

$$\begin{aligned} & [[\phi \text{ よ}] ]_{s_u, s_d} \iff \\ & u \models \langle \langle \text{speak}, a, 1 \rangle \rangle \\ & u \models \langle \langle \text{hear}, b, 1 \rangle \rangle \\ & u \models \langle \langle \text{address}, a, b, 1 \rangle \rangle \\ & u \models \langle \langle \text{KNOW}, a, d, 1 \rangle \rangle \\ & u \models \langle \langle \text{BEL}, a, \langle \langle \text{KNOW}, b, s_d, 0 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle \\ & d \models \sigma \end{aligned}$$

ここで、 $u$  は「発話の状況」と呼ばれ、先に発話のコンテキストと言っていたものと同じと考えて良い。それに対し、 $d$  は「記述された状況」と呼ばれ、発話によって、伝えられている命題内容のようなもの (の表す状況) と考えて良い。また、 $\sigma$  は文  $\phi$  の表す事態である。つまり、 $\phi$  よという発話を行った時には、その発話は、 $\phi$  が表す事態が成り立っているような状況を記述しているということである。また、 $\langle \langle R, a, 1 \rangle \rangle$  は「 $a$  が  $R$  である」という主張あるいは判断に、 $\langle \langle R, a, 0 \rangle \rangle$  は「 $a$  が  $R$  でない」という主張にそれぞれ対応するものと考えていい。KNOW は「知っている」という属性、また BEL は「信じている」という属性である<sup>13</sup>。

このような形式化によって、何が得られるか。我々が望むことの一つは、このような形式化によって、先に直観的

<sup>13</sup>先に述べたように、この他に  $u \models \langle \langle Br, a, \langle \langle \text{RELEVANT}, s_d, b, 1 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle$  のような、条件が必要であろう。しかし、relevance の話題はあまりに大きすぎるのでここでは、取り上げない。

に観察された事実が、理論の帰結として得られることであり、さらに、談話における他の現象にも、終助詞の (形式化された) 理論から、何らかの説明を与えることができるということだろう。その第一歩への、試みとして、次の文を考えて見よう。

(35) 知っているよ

この文には主語はないが、先行した談話に他の条件がない場合、話者がこの文の主語と理解されるのが普通だろう。

このことについて、我々の「よ」の理解は何を与えてくれるだろうか。上の形式化にしたがって、この文の“意味”を次のようにしたとしよう。

$$\begin{aligned} & [\text{知っているよ}]_{s_u, s_d} \iff \\ & \text{ある } c, e \text{ について:} \\ & u \models \langle \langle \text{speak}, a, 1 \rangle \rangle \\ & u \models \langle \langle \text{hear}, b, 1 \rangle \rangle \\ & u \models \langle \langle \text{address}, a, b, 1 \rangle \rangle \\ & u \models \langle \langle \text{KNOW}, a, s_d, 1 \rangle \rangle \\ & u \models \langle \langle \text{BEL}, a, \langle \langle \text{KNOW}, b, s_d, 0 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle \\ & u \models \langle \langle \text{describe}, \phi, s_d, 1 \rangle \rangle \\ & d \models \langle \langle \text{KNOW}, c, e, 1 \rangle \rangle \end{aligned}$$

つまり「[誰かが何かを知っている]よ」という文と基本的には同じ意味の事を (35) は言っているということである。

今、(35) を安藤さん ( $a$ ) が坂東さん ( $b$ ) に発話したとする。この発話を横で聞いていた人間は、この文の主語を誰だと思っただろうか。そこで、この発話の主語が聴者だと思ってみよう。つまり、 $c = b$  である。表記を簡単にするために  $\langle \langle \text{KNOW}, \alpha, \beta, 1 \rangle \rangle$  を  $\Phi_\alpha \beta$  とも書くことにする。今、次のような知識についての原則 (あるいは制約) が一般的に成り立つとしよう。

$$\langle \langle \Rightarrow, \Phi_\alpha \beta, \Phi_\alpha \Phi_\alpha \beta, 1 \rangle \rangle$$

つまり

$$\langle \langle \Rightarrow, \langle \langle \text{KNOW}, \alpha, \beta, 1 \rangle \rangle, \langle \langle \text{KNOW}, \alpha, \langle \langle \text{KNOW}, \alpha, \beta, 1 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle$$

すなわち、「もし何かを知っているならば、知っているということ自体を知っている」ということである。話者が理性的な人間なら、一般的に成立することを信じているはずだから、上の発話の時には次の状況が成り立っているはずである。

$$u \models \langle \langle \text{BEL}, a, \langle \langle \Rightarrow, \Phi_b e, \langle \langle \text{KNOW}, b, \Phi_b e, 1 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle$$

ただし  $\Phi_b e$  は  $\langle \langle \text{KNOW}, b, e, 1 \rangle \rangle$  である。

さらに、理性的な信念に関して、次のことを仮定することとはもったもなことに見える。

$$\langle \langle \text{BEL}, a, \langle \langle \Rightarrow, \sigma_1, \sigma_2, 1 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle \text{ かつ } \langle \langle \text{BEL}, a, \sigma_1, 1 \rangle \rangle \\ \text{ならば } \langle \langle \text{BEL}, a, \sigma_2, 1 \rangle \rangle \text{ である。}$$

これらの条件から、上の発話において、もし安藤さん  $a$  が、この文の主語は聴者  $b$  であると考えていたなら、次のことが成立していることになる。

$$u \models \langle \langle \text{BEL}, a, \langle \langle \text{KNOW}, b, \langle \langle \text{KNOW}, b, e, 1 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle; 1 \rangle \rangle$$

しかし、上の「よ」の条件から、同時に

$$u = \langle \langle \text{BEL}, a, \langle \langle \text{KNOW}, b, \langle \langle \text{KNOW}, b, e; 1 \rangle; 0 \rangle; 1 \rangle \rangle \rangle \rangle$$

が成り立つはずだ。つまり、話者は聴者が矛盾した知識を持っていると信じているということが、発話の状況  $u$  において成り立っているということになってしまう。しかし、普通の場面で、話者は聴者が非理性的だとは考えないだろうから、これはおかしい。ゆえに、話者は聴者を主語と意図してこの発話をしたのではない、つまり  $c \neq b$  だろう。今、他にこの主語になり得る人間は話者以外にはいないから、多分主語は話者、すなわち  $c = a$  であろうという結論になる。

このように、主語が明示されなくても、終助詞「よ」の働きにより、主語が誰であるかはある程度、推測できるという事がこの例から示される。談話の中で「終助詞」が担っている働きの中にはこういったものがあるという事は当然考えられる。つまり、知識に大きく依存した指標的表現であることから、このことは当然至極であるといえよう。このことは、また、日本語で主語が省略される事が多い事、またそれにもかかわらず意志疎通がそれほど阻害されない事と、終助詞が多用される事は無関係でない事を示唆しているようにみえる。

## 7 結論

ここでは、日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」をとりあげ、その意味的特性を論じた。これらの助詞が指標性および知識様相と深い関係を持ち、さらに談話において重要な働きをすることを示した。また、形式化の可能性を示唆し、それによって、日本語の談話における、重要な特性が説明され得る事を示した。

## 謝辞

日頃から活発な議論と励ましを与えて下さっている、竹内郁雄リーダー、島津明主幹研究員、吉本啓主任研究員の他グループの皆様へ感謝します。

## 参考文献

- [1] Barwise, Jon and John Perry. *Situations and Attitudes*. MIT Press, 1983.
- [2] Kaplan, David. "On the Logic of Demonstratives." in P. French et al. (eds.), *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language*, Minnesota Univ. Press, pp.401-412. 1979.
- [3] 川森雅仁。「知識様相と終助詞」, ICOT, STS/PSG 合同ワークショップ. 1991.
- [4] Martin, Samuel. *A Reference Grammar of Japanese*. New Haven: Yale Univ. Press, 1975.
- [5] 土屋俊, 白井賢一郎, 鈴木浩之, 川森雅仁。「日本語の意味論を求めて6」. 『言語』, 大修館 19(1990), pp. 80-87.

[6] 時枝誠記. 『国語学言論』東京: 岩波書店, 1977.